

現代中国学部立ち上げ応援記

山下輝夫

今年二〇〇〇年四月、愛知大学に新設の現代中国学部は完成年度を迎え、一年次から四年次生の学生数は、外国人留学生を含め八百名を擁することとなった。私はこれとはすれ違いにこの年の三月に、四十年の大学職員としての職場生活を終え愛知大学を辞した。幸いにも私は、新学部申請の時期から定年退職までの間、最後の職務として現代中国学部のPRの仕事を担当させていただいた。

愛知大学創立五十周年（一九九七年）を数年後にひかえ、私は本務の他に東亜同文書院記念センター委員を兼ねて、愛大創設者たちの建学への思いを語り継ぐべく『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』の編集・刊行の取り

組みを進めていた（その経緯と内容については『同文書院記念報七号』（二〇〇〇年三月発行）に小論を掲載）。そうしたある日、石井吉也学長（当時）から「愛大創立以来の中国研究・教育の歴史と伝統をふまえ総合的な中国学部を新学部として開設する」旨の話を伺った。学生時代に新中国について学んだ私は、感動する思いで「是非実現を！」と申し上げたのを覚えている。

現代中国学部構想の具体化は順調にはこび、一九九五年秋、文部省に新学部の申請を行った。この事を知った学内外関係者から「愛知大学ならではの新学部」と賞賛され、申請手続の真つ最中、地元ブロック紙の『中日新聞』が朝刊

の一面トップで大々的に「愛大に『現代中国学部』（九五年五月九日掲載）のスクープ記事を掲載し、世間をあつと言わせた。

この頃私は現代中国学部誕生への運びを期待を込めて見守り、同時に自分の学生時代に思いを馳せていた。私は一九五〇年代のなかばを学生時代として過ごした。当時の愛知大学は、建学以来最初の中国研究と学术交流の高揚期を迎えていた。中華人民共和国政府から建国記念として漢籍『四庫全書珍本初集』の受贈（五四年）、内山完造日中友好協会理事長と郭沫若中国科学院長の尽力による旧東亜同文書院大学『華日辞典原稿カード』の返還（五四年）と華日辞典編纂処（後、中日辞典編纂処）の開設（五五年）、現代中国学会第四回学術大会の本学での開催（五四年）、新中国成立後初来日の中国学術代表团（団長・馮乃超中山大学副学長・作家）の本学来訪（五五

年)、そして本学国際問題研究所編『中華人民共和国の国家体制と基本動向』勳草書房(五四年)、国際問題研究所訳『中華人民共和国憲法』勳草書房(五七年)刊行等次々に成果をあげていった。当時、これら日中学術交流の中心となったのは、本間喜一学長・小岩井淨教授・鈴木沢郎教授・桑島信一教授等の元東亜同文書院大学の先生方であつた。

新中国成立後わずか数年を経過した頃で、この時期は朝鮮戦争終結直後であり、我が国の支配者層は新中国アレルギーの時代、一方、日中国交回復国民運動の時期でもあり、当時の新中国は近くて遠い国であつた。日中平和友好条約締結はこの時代から二十年あまり後のことである。

この時期に私は、入学とともに愛知大学の文化サークルで一、二の陣容を誇る中国研究会に所属した。二年先輩に今泉潤太郎氏(現

代中国学部学部長)もいて、我々の指導に当たって下さつた。私の在学時代、中国関係専攻コースは文学部の中国文学と東洋史のみで、私が学んでいた法経学部には中国法政・中国経済コースは未だ開設されておらず、同学達と五四運動以降の中国近現代史の学習を進め、後にそのまとめを卒業論文にした。今思うと、日中関係は五里霧中で先行き見通しのない時代であつたが、愛知大学には新しい時代を求める躍動感のようなものがあつた。

新学部の文部省審査期間は二年間であり、一年目の審査にパスした時点から条件付きながら新学部のPR活動が許される。ちょうどこの時私は、役職定年で広報課主幹の任にあつた。現代中国学部の受験生向け広報活動の担当は若い世代の者に担って欲しいと考えていたが、周囲の雰囲気はそれを許さなかつた。日中平和友好条約締

結(七八年)以降、愛知大学も積極的に中国との学術教育交流を進めてきた。私は折りにふれスポーツ的に事業に協力したが、大学創立以来の歴史的な「現代中国学部」立ち上げの一端を担うことは責任重大、高ぶる気持ちを内に秘めて最後のご奉公として現代中国学部のPRを担当することにした。

まず手掛けたのは「現代中国学部案内」。大学広報の主軸は案内パンフである。昨今、活字離れとか、イメージ指向とか、受験生の大学偏差値選びとか言われているが、学部の性格からいって現代中国学部を志望する諸君はむしろ、学部の中身を吟味しての大学・学部選びの傾向が強く、これらのことは関わりのないタイプの若者たちが対象ではないか、との考えで編集・制作に取り組んだ。執筆は当時、現代中国学部学部長予定者であつた加々美光行教授をはじめ諸先生にお願いし、学部教育の理念

と教育方針の特徴を、親切に解り易く書いて頂くことにした。当初掲載写真に苦勞したが、教務課の村田安君それに中川裕三現代中国学部講師の協力が得られたことはありがたかった。

後日、現代中国学部の学生諸君と話し合ったとき、「現中のパンフ何回も読みました、受験生のときあれ読んで自分を励ましていました」「親も熱心に読んでた……」と概ね好評であったことが嬉しかった。入試課アンケート調査で、現代中国学部新入生の六割（複数回答）が「愛大受験の動機」として、大学パンフをあげていた。

現代中国学部申請の時期は、アジア金融通貨危機の前で、盛んにアジアの時代と言われ中国の改革開放政策への期待感も盛り上がっていた。折り良く、加々美教授はある予備校の公開講演会に講師として仙台・名古屋・福岡などで、「現代中国と日中関係」をテーマに

講演され、各会場は満員盛況とあったこともあった。大学では現代中国学部設置委員の先生方と相談しながら可能な限りの広報活動を展開した。新学部設置認可後、新聞・受験雑誌も新学部紹介を積極的に取り上げてくれた。現代中国学部開設のニュースは非常に評判が良かった。ある進学高校の進路部長のお話は印象に残った。「日本文化の底流は中国にあります。日本と中国は、仲良くお付き合いをしていかなくてはならない大切な隣国です。日本の大学に現代中国学部のような学部ができたことは素晴らしいことです。これから世代のためにいい教育をお願いします。」

今は十八歳人口の減少期、私大はおしなべて志願者減に頭を悩ませている困難な時期である。人気が上滑りも警戒しなくてはならない。私大新設学部は必ずしも設置者の思惑とおりにはいかない事例

も現実に生じている。ともかく開設年次で、ある程度の志願者を確保しないと右肩下がり傾向の時代だけに、次年度以降のことが思いやられる、それが当時の気持ちであった。しかし、開設初年度（一九九七年）の志願者（延べ数）は定員の十倍を超し予想を上回る状況となった。次年度は難化敬遠で減少し、右肩下がりにあるがそれでも今年度（二〇〇〇年）入試で定員の約七倍と健闘している。この志願状況は、現代中国学部の教育理念が世間に認知されつつある結果とも言えるが、近年の日中関係の冷え込みと日本人の中国離れが云々されているなかで、若者たちの、新しい時代の日中関係への強い期待と関心の現れと私は受け取っている。

一期生及び三期生の天津・南開大学「現地プログラム」に、私は二度にわたり、それぞれ前半の二か月間学生に同行し生活を共にし

た。これは現代中国学部新入生全員が八月末からワン・セメスターに相当する四か月の短期留学である。デスク・ワーク中心の仕事をしてきた私にとって、学生諸君と生活を共にし語り合うことができ、気苦労があつたとしても充実した日々である。

留学当初やや緊張していた学生たちも、半月を過ぎる頃になるとのびのびとした表情で、辞書を片手に宿舍の阿姨（おばさん）や南開大学の学生たちと語らっている。やがて、街に出て買物で値切ったり、店のおばさんと友達になつたりと若い屈託のない快活さを発揮する。「現地プログラム」の教育については私の主題ではないので避けるが、日本の大学では考えられないハードで充実したスケジュールである。「受験勉強時代を含め、これだけ勉強したのは初めて」と語った学生の表情は明るく澀刺としていた。

南開大学「現地プログラム」の教育については、朝日新聞名古屋本社で教育記者のキャリアであり旧知の由本昌敏編集委員が現地取材してくれた。一期生が「現地プログラム」で仕上げの段階を迎えた一九九七年十二月九日、『朝日新聞』名古屋版、夕刊の一面トップに「何も知らぬ若者が中国の扉を開いた——愛大生一六四人・南開大学」と大きく掲載され、引き続き朝刊で「愛大現中の挑戦」が六回にわたって連載された。その中で「学生たちは」実によくやっている。何も知らぬ若者が中国の入口に立つた。中国と日本の将来のために学ぶ若者たちだ。いつまでも、愛知大学の学生を支えたい」（劉春生留學生科長談）と南開大学の意気込みも伝えてくれた。

現代中国学部の誕生を愛大同窓生は諸手を挙げて歓迎した。学部創設の年、岐阜市で開かれた同窓会全国総会での記念講演に加々美

現代中国学部学部長（当時）を講師として招き激励の拍手をおくつた。東亜同文書院大学の同窓会・渥友会もまた愛大同窓と同じく、むしろそれ以上に現代中国学部開設を賞賛してくれている。渥友同窓は自分たちの大学が廃校となり半世紀を経てやっと、日中の平和と友好と交流の志を受け継ぐ後継者ができたとの思いである。

昨年（一九九九年）夏、一期生（三年生）三十六名は北京での二週間のフィールドワークを行なった後、北京大学・南開大学・中国人民大学等百名の学生の参加の下、共催校の工運学院において「日中学生国際研討会」を開催しその研究結果を発表した。この研討会シンポジウムについては『人民日報』、『中日新聞』、『読売新聞』、『日本と中国』などの各紙で報道された。このシンポジウムには中華全国総工会や中国教育国際交流協会、中日友好協会等の代表の方々、

日本大使館を代表して吉澤裕公使、北京大学日本文化研究所顧問であり新中国成立以来長年北京大学の日本語専門家として貢献された岡崎兼吉先生、そして、春名和雄滬友会会長（元丸紅株式会社社会長）を団長とする滬友会の幹部の方々がゲストとして参加して下さった。また、同年秋には「滬友南開愛大会館訪問団」の三十名が、現地プログラムの授業を参観し学生たちと交歓交流を行なった。七〇代以上の滬友同窓と、はたち前の現代中国学部学生たちが、ともに日中関係の過去と将来を語り合い、滬友同窓は学生諸君に励ましの言葉をかけて下さっている。その姿に、世代を超えて中国に関心をもつ同志の心のかよい合いと、愛知大学の歴史と伝統のもつ素晴らしさを改めて認識した。

この光景は名古屋テレビ制作のドキュメンタリー番組『青春の中国』として朝日テレビ系列で全国

放送された。この番組を制作した名古屋テレビの海老名敏宏制作担当部長から『ブックレット東亜同文書院大学と愛知大学』や朝日新聞の現地プログラムの記事などが番組作成のヒント」とお聞きし、同じ志をもつ老朋友に巡り合った喜びを感じた。

北京での「日中学生国際研究会」、天津の「滬友南開愛大会館訪問団」の双方に参加された元『人民日報』東京特派員で中日友好協会理事の陳弘先生は私に「こんなに熱心に学ぶ学生がいることを知って嬉しい、しかも、私たちの後輩にあたる学生たちであることを誇りに思います。この諸君が将来きつと日中関係の橋渡しをしてくれるでしょう。私が会った学生たちの語学力、理論水準、科学的な思考もかなりのレベルなので楽しみです」と語って下さった。私は陳弘先生のお話を素直な気持ちでうかがい何より嬉しかった。

私は現代中国学部の誕生で一番やりたかった仕事を最後に担当することができ、いま「終わりよければ全てよし」と、この言葉を噛み締めている。現代中国学部の学生諸君が大いに学び充実した学生時代を過ごしてほしい。そして明日の健闘を期待している。

（前愛知大学広報課主幹）

